

現代博物館考

伊藤寿朗

博物館の歴史は古い。近代日本の社会に「博物館」という新しいスタイルが登場して、すでに一世紀以上となる。

しかし博物館が、近代社会における公共的価値をもつ、社会的な機関として制度化されたのは、一九五一年の博物館法によってである。博物館は、他に解消されることのない、固有の目的と機能をもつ機関であることが、社会的に成立して三五年である。

そしてこの三五年間は、特別の意味を含んでいる。日本の博物館にとって、この時期は一九六〇年代末をほぼ境として、近代博物館としての社会的成立から、現代博物館への質的転換を遂げていくという、激変の時代でもあった。

その概要は別として（拙稿「日本博物館発達史」伊藤・森田編著『博物館概論』学苑社一九七八年）、本稿では、七〇年代以降の博物館をめぐる、新しい課題と、その考え方の軸について提起する。

一——博物館の大衆化

「博物館」というと、日本ではいまだに「古代エジプトに始まり、以来その国の文化のパロメーターで……」という類の大時代があった陳腐な発想がある。

しかし欧米の研究書は、博物館の発を、近代の市民革命期とし、その前史と基本的な区別

- 一——博物館の大衆化
- 二——第三世代の博物館像
- 三——地域博物館論
- 四——消費社会の博物館
- 五——博物館運営の問題——学芸活動の制度的保障

をしている。つまり資料（コレクション）が万人に平等に公開され、開放されるという条件を、博物館成立の基準としている。

博物館は、「自由な個人の契約による、合理的な社会」を理念とする、近代社会の仕組みのなかで成立し、その枠組に即して発展してきた。博物館は近代社会の典型的所産でもある。

六〇年代末以降、博物館数が急激に増加し、その大衆化が進行したということは、戦後の社会生活の成熟を反映したものであるということができよう。

①——博物館ブーム

「博物館」という際、その範囲は時代によっ

表一 博物館と他の機関を区別する条件

- (1) オリジナルな資料を収蔵（飼育を含む）していること
- (2) 継続的な展示施設・設備をそなえていること
- (3) 職員による独自の公共的運営がなされていること
- (4) 継続的な一般公開を目的としていること

表二 日本の博物館開館数

(1871~1977年)		
総数	3,289館	(100%)
明治	118館	(3.6%)
大正	159館	(4.8%)
昭和戦前・戦中	354館	(10.8%)
昭和戦後	2,538館	(77.2%)
開館年不明	120館	(3.6%)

※廃館、閉館した館を含む。

昭和戦後開館博物館数

(1945年8月~1977年12月)		
総数	2,538館	(76.9館)
1945~49年	65館	(13.0館)
1950~54年	245館	(49.0館)
1955~59年	252館	(50.4館)
1960~64年	306館	(61.2館)
1965~69年	524館	(104.8館)
1970~74年	774館	(154.8館)
1975~77年	372館	(124.0館)

※カッコ内は年間平均開館数

※倉内・伊藤・小川・森田編『日本博物館沿革要覧』（野間教育研究所紀要別冊）講談社1981年

て変化しており、対象も同様ではない。そこで表一の条件を設定し、近代日本の博物館開館数を調査すると、表二のような結果となる。明治維新直後の一八七一年から一九七七年までに閉館した博物館は三、二八九館存在している。そのうち二、五三八館（七七・二%）は戦後の開館である。戦後の内訳をみれば、六〇年

代後半以降の急激な増加が特徴的である。六五〇七七年のわずか一二年間に一六七〇館（総数の六五・八%、年間平均一三九館）もの博物館が開館している。別の資料（文部省社会教育局『教育的観覧施設一覧』文部省一九三九年）でみれば、戦前の博物館のピークは、一九三八（昭和十三年）の海外植民地を含めた三二〇館、年間入館者数二、六三六万人である。

これに対し、調査時点の一九七七年末現在では、廃館、閉館した館を除き、表一の三のよう、二、五七二館の博物館が人々に公開されている。一九七七年以降も、毎年一五〇館以上の博物館が開館しており、廃館となった小数の館を除き、一九八六年三月現在では四、〇五七館が記録されている（丹青総合研究所『博物館・情報検索事典』丹青社一九八六年）。さらに昭和六十一年度では、年間二五二館の開館が記録されている（同上『季刊ミュージアム・データ』一号一九八七年）。日本経

済の低成長下、そして「行政改革」というなかでも、六〇年代末以降の博物館ブームはいまだ続いている。以上のように、博物館のあり方を論じる際、その前提が急激に変容している事実に着目しておかなければならない。現在の博物館の問題を考へるには、戦前との対比はもとより、戦後の六〇年代との比較すらも困難となってきた。博物館数の急激な増加のなかで、博物館のあり方が、新しい次元で問われてきているのである。

② 年間三億人の入館者

博物館数の急激な増加ということは、それを享受する、人々の利用が飛躍的に拡大していることの反映である。「あなたの住む町にどんな公共施設がほしいですか」という類の、各種アンケート調査では、美術館、植物園、資料館などの博物館が必ず上位に挙げられている。そして特徴的なことは、二、三の例外を除けば、道路や学校と異なり、反対意見は皆無である。

現在、日本の博物館四、〇五七館の年間入館者数は、表一四のように、三億人程を推計することができる（内動物園入園者六、九三三万人）。地理的な偏在、世代的な偏在があるにしても、膨大な利用状況といえよう。これは、日

表一 3 1977年末現存博物館設置者別・種類別内訳

区分	国立		公立		私立						学校立		不明	合計 (%)				
	国	都道府県	市	町	村	財団法人	公益法人	その他の法人	宗教団体	会社	個人	私・団体				私・不明	学校1	学校2
複合系	総合	13	3			1								1		18(0.7)	240	
	地域	3	8	91	63	7	10	7	7	4	8	2		5	7	222(8.6)	(9.3)	
人文・社会系	考古	2	14	50	38	5	6	2	8	2	11	3	2	6	4	1	154(6.0)	
	歴史	13	34	155	174	29	45	7	23	21	45	8	12	5	10		581(22.6)	1,418
	民俗	2	9	70	169	56	7	1	6	12	40	8	9	3	18	1	411(16.0)	(55.1)
	記念	3	3	26	12		26	3	12	1	7	3	1				97(3.8)	
	宗教							1	173				1				175(6.8)	
	美術	12	31	32	8	2	110	2	11	17	37	1	13	3	1		280(10.9)	280 (10.9)
理工系	科学技術	5	17	53	3	1	10	8	1	9	2	1		5	2		117(4.5)	
	産業	1	1	4	4	1	4	2	1	26	2	10	1	1	1	1	60(2.3)	329
	天文		2	15	3		3	1		7	2				1		34(1.3)	(12.8)
	自然史	4	12	19	16	3	11			18	9	4	2	9	3	1	111(4.3)	
	自然保護地域		2	3	2												7(0.3)	
	動物		6	45	1		8			24			1				85(3.3)	
生物系	植物	8	19	18	7		6	2	6	34	8	1	2	12	2		125(4.9)	305 (11.9)
	動植物		2	2						6							10(0.4)	
	水族	1	6	13	8		1	3		37	2	2		6	2	1	82(3.2)	
	昆虫		2							1							3(0.1)	
不明																	-()-()	
合計 (%)		54	181	599	508	104	248	39	248	219	173	44	43	56	51	5	2,572(100)	
		(2.1)	(7.0)	(23.3)	(19.8)	(4.1)	(9.6)	(1.5)	(9.6)	(8.5)	(6.7)	(1.7)	(1.7)	(2.2)	(2.0)	(0.2)	(100)	
		54		1,392					1,014				107		5			
		(2.1)		(54.1)					(39.4)				(4.2)		(0.2)			

※分館(45)、併設館(86)、継続館(132)、再開館(41)は各1館として扱った。

※「学校1」とは高等教育機関、「学校2」とは初等・中等教育機関

※1977年12月末現在。

※倉内・伊藤・小川・森田編『日本博物館沿革要覧』（野間教育研究所紀要別冊）講談社 1981年

表一 4 博物館入館者数推計

- (1) 登録・相当館（博物館法の対象となる館）663館（新設13館を除く）10,917万人（昭和58年度）
- (2) 類似施設（博物館法の対象とならない館）の回答館795館（類似施設の23.5%）6,082万人（昭和60年度）
- 類似施設全体の入館者数推計（回答館数の割合からすると4.25倍だが、小規模館の回答が少ないので3倍と推定する）6,082万人×3倍=18,246万人
- 合計：登録・相当館10,917万人+類似施設18,246万人=29,163万人

※文部省大臣官房調査統計課『指定統計第83号 社会教育調査報告書』昭和59年度（大蔵省印刷局1986年）

※日本博物館協会『博物館研究』Vol. 22, No. 3, 1987年

※指定統計第83号は数年毎に行われる調査で実態を反映していると考えてよい。

本の全映画館二、一〇九館の、年間入場者数一億六、〇七五万人（一九八六年九月現在、全国環境衛生同業組合連合会調査）と比較してもわかるように、ひとつの産業領域を形成しえるほどの数である。

表一 5 博物館数・入館者数の変化

1957年	博物館数	531館	年間入館者数推計	4,417万人
1986年	"	4,057館	"	29,163万人
29年間		7.6倍		6.6倍

※1957年博物館数は、運輸省観光局『観光資源要覧第四編陳列施設』（1957年）

※1957年年間入館者数推計は前掲『社会教育調査報告書』昭和30年度版より推計

※1986年博物館数は前掲『博物館・情報検索事典』

表一 6 博物館の社会的課題の変化

1960年代まで…博物館が存在することで社会的価値を主張できた時期
（存在することに意味がある時代）

↓

1970年代以降…博物館相互間の競争と相対化が急速に進行した時期
（博物館とその活動が淘汰される時代）

↓

1980年代後半…市民に博物館のメッセージを提起する時期（博物館のもつ対社会的力が問われる時代）

各地に、そして各分野に複数の博物館が生まれ、さまざまな活動が試みられてくるなかで、博物館があるということだけで評価される時代ではなくなつた。

地域差や分野による違いはあるが、博物館総体の時代的变化をみれば、表一6のように、軸となる社会的課題は確実に移行してきている。すでに博物館相互間の競争と相対化は急速に進行している。サファリ式動物園の全国的な衰退にみられるように、学芸活動の蓄積を欠いた安易な運営をしている館は次々と淘汰されてきている。博物館とその活動は、人々にとって相対化されてきており、内容

③ 博物館の相対化

博物館数の急激な増加、入館者数の飛躍的拡大

博物館に対する、人々の利用目的は実に多様である。それはレジャーの場であり、レクリエーションの場でもあり、また学習の場でもある。利用のスタイルはさまざまであり、固定されたものではない。しかし、博物館のあり方を考えるに際し、年間三億人程が博物館を利用しているという事実は深く、そして重い。

大というなかで、人々のもつ博物館のイメージは大きく変わってきている。また博物館自身も、その対社会的意味、役割というものを変容させてきている。

この間の変化について、同じ条件でほぼ正確な対比が可能となる一九五七年を例にみても、表一5のような結果となる。二九年間で、博物館数は七・六倍、年間入館者数は六・六倍である。

の薄い館が市民から見捨てられていくのは必然である。そして、博物館とその活動は、人々の生活のどういう側面で意味をもち、また社会的役割を担うのかという、価値の内実が吟味され、問い返される時代となってきたわけである。

市民に対し、博物館主体として、どのように吟味され、深く検討されたメッセージを提起することができると、活動内容の質が問われてきているのが、現代の博物館である。しかもその活動内容の質は、博物館関係者だけでなく、意識的な市民自身によっても、比較検討されるまでに広がり、かつ深まってきた。これは博物館の大衆化が生み出した大きな成長であり、発展であるといえよう。

項目	第一世代	第二世代	第三世代
・展示の量	・少数の宝物	・選択できるほどは少ない展示量	・選択できるだけの豊富な展示量
・図録(カタログ)	・なし	・特別展図録(展示している資料の解説のみ)	・テーマに関する総合的な資料集として可能な内容
・展示の解説	・なし	・一部実施、一部展示解説員(コンパニオン)	・レファレンス・コーナーの設置
・教育事業	・なし	・一過性の事業中心	・継続的な事業中心
・教育事業担当者	・いない	・学芸員、臨時雇用のコンパニオン	・ミュージアム・エデュケーター
・講演会	・なし	・ときどきやるが参加者は受身	・問題提起を中心とするシンポジウム
・映画会	・なし	・よくやる	・館製作ビデオの常時利用
・観察会・見学会	・なし	・一過性のイベントとしてたまにやる	・継続的な蓄積を重視しよくやる
・学習施設設備の開放	・もともとなし	・集会室の開放程度	・図書室、学習室、実験室、または特別展示室の開放と充実
・友の会	・なし	・よくやるが参加者は受身(受益者団体化)	・一定期間をへたらの自主グループへの独立をうながす
■運営	孤立・悠悠自適(関係者だけが対象)	啓蒙的アッピール(世間の無理解を嘆く)	対社会的メッセージ(社会的存在を主張)
・館長	・名誉職館長	・行政職・非常勤館長	・専門職館長
・広報活動(パブリシティ)	・やらない	・学芸員による部分的・一時的試み	・パブリシティ担当者による系統的実施と積極的なイメージづくり
・条例・寄付行為	・なし	・博物館法の引き直し	・独自の目標を明記し、具体的方針を提起
・博物館協議会	・なし	・文化財関係者を中心とした年数回の顔合わせ	・市民意志の反映の場として、市民の参加と権限の行使を保障
・年報	・なし	・事業報告中心	・博物館運営に関する問題提起、意見発表
・休憩所	・便所だけ	・ソファと灰皿程度	・レストラン、喫茶室
・売店	・なし	・受付を兼ねた、絵ハガキと売れ残りの図録程度	・専門書をはじめないまでもそろった充実したミュージアム・ショップ

伊藤寿朗「地域博物館論」(長浜功編『現代社会教育の課題と展望』明石書店1986年所収)

二——第三世代の博物館像

六〇年代末以降の、博物館数、入館者数の急激な増加、そして博物館自体の相対化の進行という二〇年程の変化は、戦後の博物館の、構造的変容ともいえるべき激しいものであった。

博物館における活動内容の質についても、表

①—博物館の三つの世代

これは竹内順一「第三世代の博物館」(瀧崎安

一7のように、かつての、国宝や天然記念物という資料の稀少性と、その管理を中心とした活動とは異なる、新しい博物館像が模索されており、座標軸が変わってきたのである。

之助記念館『冬晴
春華論叢』第三号
一九八五年）の問
題提起にもとづい
て、博物館の主要
な機能と、いくつ
かの事業形態を項
目毎に整理し、世
代間の違いを対比
したものである。

第一世代とは、
国宝や天然記念物
など、稀少価値を
もつ資料（宝物）
を中心に、その保
存を運営の軸とす
る古典的博物館で
ある。個人コレク
ションを母体とし

た○○文庫、収集資料の保存を目的とした歴史
民俗資料館、個人の顕彰を目的とした○○記念
館などがこの世代の典型である。第一世代は、
観光や娯楽という非日常利用の場であり、多
くは観光地に設置されている。日々の生活とは
別の世界を提示することに意味をもち、人々も
それを期待している。特別の機会に観覧する博

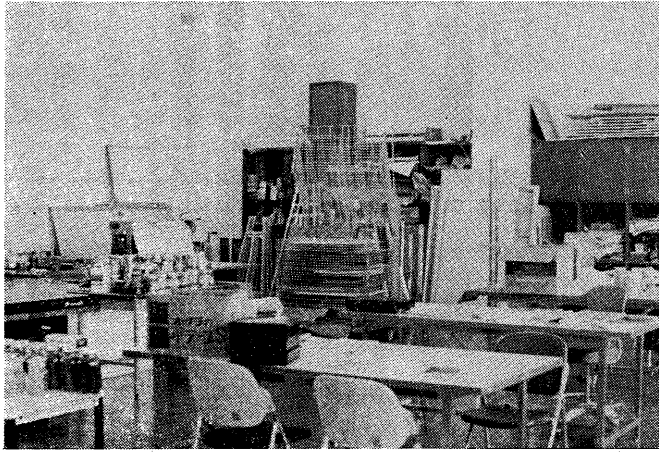
表一 7 第三世代の博物館像

項目	第一世代	第二世代	第三世代
■目的 ・設立の理由	保存志向 ・宝物の保存施設	公開志向 ・町のシンボル・コレク ションの寄贈 ・公開	参加・体験志向 ・地域社会の要請
・利用の形態 ・日常生活との関 連 ■専門職員	・娯楽、観光 ・乖離（別の世界を 提示） 番人	・一過性の見学 ・部分的関係（導入 として提示） 孤独な学芸員	・継続的な活用 ・対象化（課題を提 示） 専門職集団（分業 化とローテーション）
・条例・規則上の 位置 ■建物 ・設計の中心 ■調査・研究	・なし 倉庫中心 ・威圧感を重視 やらない	・行政職・事務職待 遇 展示室中心 ・外観を重視 学芸員の個人的興 味と関心の範囲	・専門職待遇 事業中心 ・機能を重視 社会的要請に応え た調査・研究、市 民との共同調査・ 研究の組織化とル ールづくり
・紀要	・なし	・学芸員の研究発表	・市民の研究発表、 共同調査・研究の 発表
・研究用施設	・なし	・事務室で兼用	・研究室、作業室を 別置
・資料の研究用公 開	・やらない	・知人だけに公開・ 援助	・資料の扱いのルー ルを指導したうえ で差別しない
・研究用施設設備 の開設	・もともとなし	・やらない	・ルールを決めて研 究室、実験設備等 の開放
■収集・保管	開館したときのま ま	なんでも集めてお く	新しい価値を発見 しながら集める
・収集の記録	・資産台帳のみ	・受入台帳中心	・資料カード中心 （登録可能な資料 のみを受入れる） ・登録記録担当者 （レジストラー） ・資料目録・索引が 完備 ・余裕をもった収蔵 室（増設可能なス ペース） ・保存・修復専門職 員 ・安全管理担当者 と総合管理
・収集記録担当者	・いない	・学芸員	・参加・体験型の展 示（演示、触る展 示、レプリカの活 用、展示演出）
・資料目録・索引	・なし	・一部年報等に記載	・資料の多様な見方 が可能（観察力の 育成をめざした比 較資料の充実）
・保存施設	・なし（すべて展示）	・収蔵室満杯	
・保存・修復担当 者	・職員の経験	・外部委託、講習会	
・管理・警備	・宿直と監視員	・一部機械化と外部 委託	
■公開・教育 ・展示のかたち	展示のみ ・常設展のみ	展示中心 ・常設展と特別展の 組み合わせ	
・展示の内容	・単品の価値中心	・テーマ中心、A V 機器の活用	

物館であり、展示以外の活動をする必要も生ま
れない。

第二世代とは、資料の価値が多様化するとと
もに、その資料の公開を運営の軸とする現在の
多くの博物館である。県立博物館、中規模の市
立博物館がこの世代の典型であり、どの館でも
常設展示の特色と、特別展示の開催に腐心し
ている。学芸員という専門的職員が登場するの
も第二世代からであり、物の入調査・研究、
物の入収集・保管、物の入公開・教育とい
う、博物館固有の機能に即した活動も展開され
てくる。第二世代は、知的好奇心・探求心を満
たすための一過性の見学施設であり、多くは
市街地の周辺に設置され、特別展示以外はあま

写真一 宮城県美術館の創作室（志澤政勝撮影）—さまざまな創作や表現の道具が備えられており、自由に参加できる



り訪れない。展示以外に、一過性の教育事業など、さまざまな機会を提供し、要求に応えることに意味をもち、人々もそれを期待している。

第三世代とは、社会の要請にもとづいて、必要な資料を発見し、あるいはつくりあげていくもので、市民の参加・体験を運営の軸とする将来の博物館である。第三世代とは期待概念であり、典型となる博物館はまだない。しかし、部分的には、①大阪市立自然史博物館、横須賀市博物館、川崎市青少年科学館その他の館で実施

されている、市民参加の地域共同調査・共同研究、②宮城県美術館、いわき市美術館などのワークショップの試み、③平塚市博物館の、活動のフィールドを明記した条例づくり、その他、紀要の市民への開放など、各地で新しい試みが蓄積されてきている。第三世代は、参加し体験するといふ継続的な活用をおして、知的探求心を育くんでいく（要求を育くむ）ことをめざす施設であり、日常の利用が可能な場所に設置されることが条件となる。日常生活を対象化し、地域に、また社会に内包する新しい価値を発見し、課題を提起していくことは、日々の生活への新たなメッセージを提起していくということである。第二世代は図書館の利用スタイルと同じように、すべに関心をもっている人々の要求に応えるということを軸としている。これに対し、第三世代は、関心の薄い人々をこそ対象に、その自己学習能力を育くむ（要求を育くむ）ということを軸とするところに意味があり、また人々もそれを期待している。

② 利用形態の変化

以上のように、博物館の三つの世代は、人々の重層的な利用形態に対応したものである。

日本の博物館を総体としてみれば、六〇年代末以降、保存を軸とした第一世代から、公開を

軸とした第二世代への脱皮が図られてきた。そのエネルギーとなったのは、博物館に対する人々の多様な期待という社会的な要請であった。同時に、その社会的要請を受けとめるだけの、中小博物館における学芸活動の蓄積があり、両者が結びついて第二世代の実質的な形成がなされてきたと考えられる。

第一世代を否定する論理としての「公開」という次元は、また無限の機会提供機能であり、一過性の利用に対応したものである。そして、この第二世代は、同時に、第三世代の「参加・体験」という次元から否定の対象とされるといふ間隙に位置しているわけである。

そして現在、第二世代から第三世代への転換のキーワードとなるのが、一過性の利用から継続的活用へという利用形態の変化である。

博物館利用の拡大とともに、その利用形態の質的变化が生まれており、そのエネルギーとなっているのは、市民自身の、多彩な学習活動の広がりである。学習の個人主義化、高度化、多様化のなかで、市民自身が継続的な学習の場としての、博物館の整備を要請してきている。

③ 市民の学習活動の二つの方向

一過性の利用から継続的活用へという、市民の博物館利用の新しい形態が育ってきている。

現実には、博物館側の継続的活用に応える体制が未整備のため、三億人の入館者の圧倒的多数は一過性の利用である。しかし集会室や各種教育事業など、継続的な活用条件や場の整備に努力している館では、新しい利用形態が確実に育っている。

その際、市民の学習活動には、大きく二つの方向がみられる。

一方では、どこでも通用する一般的、普遍的な知識・教養を要請するという方向である。カルチャーセンターのような、種類の異なるさまざまな知識の量を要請するならば、博物館の対応は、たとえ継続的なスタイルをもったとしても、第二世代の「公開」という、啓蒙的な機会提供機能の徹底化の方針となっていく。

他方では、生活の場である地域をみなおし、あるいは日常生活における新しい課題の発見を要請するという方向である。自己学習能力の育成という、知識の質を要請するならば、博物館の対応は、一方的な機会の提供のみでは不可能であり、第三世代の「参加・体験」という、継続的で主体的な参加を求める新しい方針となっていく。

両者の学習の方向は固定的なものではないが、後に述べる「消費社会」という受け身の学習が強いとされている社会のなかで、博物館の対

社会的役割をどこに置くかという、重要な選択肢でもある。

④プロセスに価値をおく教育観

第三世代の「参加・体験」ということは、目標にいたるプロセスを重視するということであり、それはまた、固定したひとつの結論を求めないということでもある。

ボストン子ども博物館は、

I hear and I forget (聞いて忘れる)

I see and I remember (見ておぼえる)

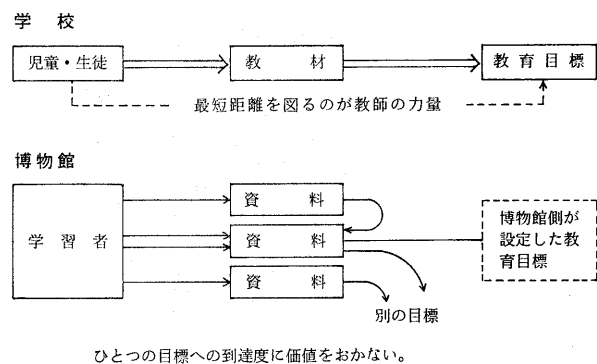
I do and I understand (行なって理解する)

これを館のスローガンとしている。つまり知識の量ではなく、体験による理解の質こそが大切であるという教育観にもとづいている。

学校教育においても、オープン・スクールや社会科の授業を創る会などの、体験学習をとり入れた新しい試みが育ってきている。しかし、第三世代の「参加・体験」ということは、学習方法のひとつということ以上に、基本的な教育観の違いを含んでいる。

学校教育は、各発達段階に応じて、教育目標↓学年目標↓学級目標が設定され、そして各教科毎の単元が、合理的かつ綿密に計画されており、壮大な知識教授の体系がつけられている。

図一1 学校と博物館の教育方法の違い



その教育方法は、系統性を重視し、集団的形態で、目標にいたる最短距離を図ることを信条としている。教材はそのための道具にすぎない。確かに、小・中学生一、七二九万人（昭和五十九年度）を、限られた期間内に、主権者としての国民にふさわしい、資質と能力を身につけさせるには、効率的な方法をとらざるをえない現実があるだろう。

しかし、こうした学校教育のなかでつちかわれてきた教育観や教育方法が、教育のすべてではない。前提は異なっているが、博物館の教育

方法を、学校教育との比較でみれば、図1の方法による。

博物館は、人間の発達段階ではなく、個々の人々の好奇心(知的探求心)を軸としており、経験主義に基礎をおいている。博物館のなかでも、プラネタリウムの教育は学校教育に類似した性格をもつが、博物館の教育方法は、非系統的であり、非集団的であり、なによりも、ひとつの目標への到達度に価値をおかないということとを信条としている。

博物館の学習は、そして自己学習能力というものは、学習者がその現場に身をさらし、参加し体験するなかで深まっていくものである。したがって、そうした主体的な参加の機会が可能となる、さまざまな条件を整備することが、博物館に求められているわけである。

⑤—中小の博物館こそ第三世代化の舞台

戦後の博物館を時系列でみれば、第一世代から第二世代へ、そして現在は、収集基準や展示法などの各機能毎に、第二世代と第三世代の相克がはじまっているといえよう。

「参加・体験」を運営の軸とする第三世代化の実現は、学芸員の体制、施設・設備の条件が整った、県立レベルの大型館が有利にみえる。しかし第三世代化がめざしているのは、市民の

主体的な「参加・体験」による、自己学習能力の育成であり、市民と博物館が協同して新しい価値を発見し、またつくりだしていくところに、その本質がある。

その点から、市民の日常的な活用が可能であり、また市民へのフィードバックが可能で、地域の中小の博物館こそが、第三世代化の舞台にふさわしい。その場合、博物館として自立した運営が制度的に保障され、学芸活動の蓄積が可能であることは最低の条件である。困難な条件下にあることは最低の条件である。困難な条件下にあっても、学芸活動の保障された館では、幾多の試みと、その蓄積がはじめられてきている。

ところで、第一世代、第二世代、そして第三世代と、人々の期待するものは異なっている。日々の生活が息苦しいとき、人々はその圧迫感からしばし解放された世界を必要とする。不滅の文化遺産を目前にして、静かに憩い、疲れをいやす空間が求められる。そこにはただ静かに資料があればよい。こんな人々の思いをも飲みこみながら、第三世代化の潮流は静かに流れていく。

三——地域博物館論

「第三世代の博物館像」とは、活動内容の質

的变化を、時系列でみることにより、新しい博物館の方向性と、そのために必要な条件を提示しようという考え方である。

これに対し、地域博物館論というのは、博物館を並行軸で、目的の相違によって区分するという考え方である。博物館がどのような社会的価値の実現をめざすのかという、目的の相違を軸として、地域志向型、中央志向型、観光志向型と、大きく三つに区分し、それぞれ固有のあり方を示そうという考え方である(拙稿「地域博物館論」前掲『現代社会教育の課題と展望』所収)。

①—緊張した博物館観

「地域博物館」という用語は、現在ひとつの流行となつている。目的意識の曖昧な館や、観光目的の館までが「地域の資料を中心としているから地域博物館」と主張している。また大型の県立博物館までが「県内地域をサービスマリアとしていから地域博物館」という位置づけ方をしており、用語としても混乱している。

七〇年代半ばに登場した、地域博物館という主張は、博物館が相互に相対化されてきた新しい時代を象徴している。地域博物館という概念は、たんなる大形館への対抗を意味しているのではない。博物館の総体を対象化し、それを目

的の相違によって、地域志向型、中央志向型、観光志向型と相対化し、しかも相互の対立的契機を明示することによって、固有の博物館観として成立してきたものである。

そこには、博物館の目的はひとつであるという、素朴な一体観はすでない。地域博物館を主張すること自体が、その内部に中央志向型、観光志向型への対立的契機を含むことになる。自らの主張が、同時に自己への批判を内在させるといふ、緊張した博物館観の成立である。

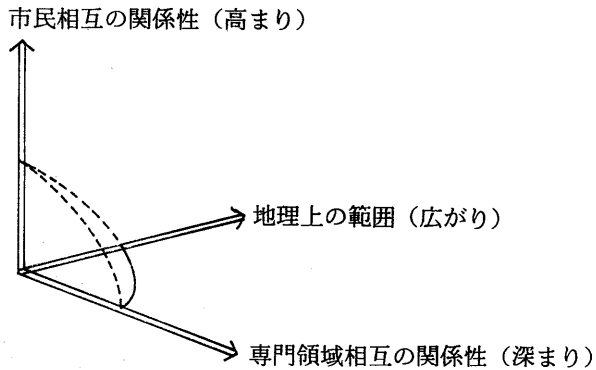
② 博物館の三つの型

博物館は、設置者、また扱う資料の種類などにおいて、実に多様である。そして、各博物館それぞれが個性を主張するという、多義性をもっている。

博物館の生命ともいふべき個性を大切にしながら、そこに、どのような社会的価値の実現をめざすのかという、いくつか共通する目的をみいだすことは可能である。博物館を目的の相違によって分けてみると、表—8のように整理できる。①地域志向型、②中央志向型、③観光志向型というように、博物館としての共通した機能を持ちながら、それがめざすところの対社会的価値と、そのプロセスは大きく異なっている。

各目的の相違にしたがい、調査・研究の軸、

図—2 地域博物館の三本柱



教育内容編成の軸、教育方法の軸も当然異なってくる。さらに収集方針や資料登録システムなどの諸機能においても、その軸は異なってくる。現実の博物館においては、①学芸職員の考えが反映されやすい、教育事業の内容は地域志向型、②設置者の考えが反映されがちな、展示の内容は中央志向型、③しかし実際の入館者の意識は観光志向型というように、三つの型が混在している場合が多い。目的の異なるものが同居しているため、博物館の性格が曖昧となり、基

表—8 博物館の三つの型

目的	調査・研究の軸	教育内容編成の軸	教育方法の軸
地域志向型	資料と人間との関係の、相互のその間に課題を見出すことを中心とする。軸となるのは人々の生活課題(地域課題)	地域と教育内容の連関を重視する内容(教育内容を地域生活にもとづいて編成)	ものを考え、組み立て、表現する能力の育成を中心
中央志向型	資料と人間との関係の、一般性、共通性を課題とし、そこに価値を見出すことを中心とする。軸となるのは各専門領域毎の法則や法則性	組織された知識・技術の体系を重視する内容(あらゆる国民に均等な教育内容の編成)	知識の教授を中心
観光志向型	資料と人間との関係の、特殊性や意外性を課題とし、そこに価値を見出すことを中心とする。軸となるのは稀少性	稀少価値を重視した内容編成	資料のもつ意外性、人気性を中心

本方針を定めにくくしているわけである。

地域博物館という概念は、関係者の間でも誤解されているような、サーブिस・エリアとしての特定範囲を意味しているのではない。それは図12のように、三本の要素が均衡を保って成立することが理想である。そのためには、①人々の生活の場としての地理上の範囲（広がり）を前提に、②資料の価値に関する専門領域相互の関係性（深まり）、そして③各種活動における市民相互の関係性（高まり）を組織化（編成）していくことが条件である。

したがって地理上の特定範囲をもち、市民とともに、各種活動に取り組んでいたとしても、特定の専門領域にのみ範囲を限定している館は、限界をもっている。逆に、地理上の特定範囲をもち、資料について、各専門領域相互の関係性に取り組んでいたとしても、市民を一方的な啓蒙対象としてのみ考えている館は、地域博物館とはいわない。

③—地域博物館二つの主張

地域博物館という概念は、博物館主体の課題意識を軸としており、その本質は、旧来の博物館のあり方に対して攻撃性をもつ、過激な博物館観である。

かつての博物館が、理想とし、モデルとして

きたのは、東京国立博物館、国立科学博物館という大形の中央志向型博物館であった。小規模館は、そのミニチュアと観念され、規模が大きく、国宝や優れた資料を数多く所蔵し、職員も多く、予算の多い館が良い博物館であった。ここでは「科学的知識の普及」、「優れた作品の普及」が課題であり、博物館主体の課題意識は稀薄とならざるをえなかった。

地域博物館は、かつての博物館がモデルとしてきた、中央志向型博物館のあり方に対して、大きく二つのことを主張する。

第一に、資料の価値づけ方についてである。普遍的な科学的成果（法則、法則性）を、地域に適用するという方法に対して、その方法的逆転を主張する。資料の地域的特徴というのは、その専門分野における普遍的な法則、法則性が確定してはじめて可能である。その場合、軸となっているのは、あくまでも各個別専門領域における普遍性である。

地域博物館は、こうした各専門領域毎の科学的成果を否定しない。しかしその成果を地域に適用し、総和するのではない。逆に、地域課題を軸とした迫り方、その総合性のなかに、新しい価値を発見していくという方法的逆転である。すなわち、各専門領域毎に個別細分化され、抽象化される過程で捨象される、規定性や媒介

性という、相互の関係性に価値をみいだしていく観点である。したがって、自然科学の領域と人文・社会科学の領域の、地域課題に即した総合化は、地域博物館の条件とすらなっている。

第二に、博物館と市民との関係についてである。市民を利用者として客体化し、そのレベルに応じて「科学知識を普及する」啓蒙対象とする方法に対して、その方法的逆転を主張する。地域のさまざまな課題を、博物館が代行し、知識体系として完成された成果を、享受者たる市民に普及するのではない。

地域の課題は、市民自身が主体となって取り組むことが基本であり、地域博物館の役割は、こうした市民自治の原則を、博物館の領域において、そして博物館の機能を通して育くみ、支えていくことである。地域課題への取り組みは、地域に生活する人々の、知恵と協力がなければ不可能である。地域博物館は、そうした、地域に生活する市民自身の自己学習能力を刺激し、育くみ、自分で自分の学習を進展させていく力量（自己教育力）の形成を図ることを課題としている。

地域の課題に、博物館の機能を通して、市民とともに応えていこうというのが地域博物館である。

表一 9 教育における二つの型

	知識者養成型	生活者育成型
基本となる教育観 (目標とすべき人間像)	どこでも通用する知識にもとづく「なんにでもなった人間」	自らの表現によつて生活を築いていく「生活者としての人間」
教育内容	組織された知識や技術の体系(あらゆる国民が同一の内容を授けられるという内容編成)	地域と教育内容の連関を重視(地域と教育内容の結びつきを中心とした内容編成)
教育方法	合理的で一貫した知識教授の体制(生活現場からの距離を必要とする)	ものを考え、組み立て、表現する(技術的領域の重視(生活現場に入りこむことを必要とする))

※海後宗臣『教育編成論』1948年(『海後宗臣著作集』第2巻 東京書籍 1980年に再録)の視点にもとづいて整理した。

④—知識者養成と生活者育成
 地域博物館が、市民の自己教育力の形成を図るといふことは、地域に生活する市民に必要な力量とは何かという、基本となる教育観の問題につきあたる。

近代の教育を、海後宗臣の視点にもとづいて

整理してみると、表一9のように、大きく知識者養成型、生活者育成型という、二つの考え方に分けられる。

第一は、知識者養成を基本とする教育観である。「どこでも通用する知識」をもとに、「なんにでもなれる資質をもった人間」の養成を目標とした教育観である。これは近代の国民教育において目標とされてきた人間像であり、学校教育という制度をとおして、強固なまでに定着し、人々の「教育」という観念を呪縛している。

第二は、生活者の育成を基本とする教育観である。これは「教育」という言葉は使われないが、「一人前」といわれているように、人々の間で営々としてつちかわれてきた、人間育成の技である。自らの表現によって生活を築いていく、「生活を自らきり開くことのできる資質をもった人間」の育成を目標とした教育観である。それは柳田國男(長浜功編集解説『柳田國男教育論集』新泉社一九八三年)や宮本常一(同『忘れられた日本人』岩波文庫一九八四年)が「常民」の概念によって、吉本隆明が「生活者」の表現によって描いた世界である。人間育成のため、生活の現実と教育の一体化に、教育的価値をみだしていくということである。この基本となる教育観の違いは、当然、教育

内容、教育方法においても異なった軸となって現われる。

第一に、知識者養成型に要請される教育内容は、どこでも通用しうる知識の量であり、教育内容の一般性と普遍性である。組織された知識や技術の諸体系が、教科目や教科書のように均等に編成され、あらゆる国民が同一のものを、共通に授けられるという内容編成である。教育方法においても、知識の習得を主とする、内容的側面を軸とした方法(実質陶冶)であり、合理的で一貫した知識教授の体制である。それは、現実の複雑にからみ合った生活現場からの距離をもつことを必要とし、静かな個人的蓄積を特質とする方法である。

第二に、生活者育成型に要請される教育内容は、地域における生活の実体であり、教育内容の具体性と地域性である。生活のさまざまな場面における教育的課題を発見していくためには、地域の生活現実に入りこみ、学習を展開させていくという、地域と教育内容の結びつきを軸とした内容編成である。教育方法においても、対象に働きかける能力の育成を主とする、自己学習能力の側面を軸とした方法(形式陶冶)であり、ものを考え、組み立て、表現するという技術的領域の重視である。媒介となる学習内容の性格を、学習者が自ら獲得していくという能

力を育成していくためには、生活の現実によく入りこんでいくことを必要とする。動的な協同作業のなかで、自ら課題を発見していくことを特質とする方法である。

ただ、「地域の教育力」ということも、教育内容として編成され再構成されなければ、無力である。地域の現実を追認していくだけでは教育内容とはならない。困難なのは、直接の関係性が見えない科学的法則なども含めて、生活の現実のなかから教育内容を編成し、構造化していく作業である。それが専門的職員の力量であり、その経験の蓄積である。

以上のような教育観の相違を、先に述べた、博物館の三つの型と重ね合わせてみると（観光志向型博物館を除き）、地域志向型博物館は生活者育成型の教育観に対応し、逆に中央志向型博物館は知識者養成型の教育観に対応していることが理解できよう。

⑤—コンテキストの復権

以上のような、地域博物館の主張は、近代の合理主義的な思惟様式というものへの批判を内在している。それは、専門的研究というものあり方について、また教育というものあり方について、新しい、そして困難な問題を提出している。

その展開への手がかりとなるのは、「コンテキスト」という概念である。コンテキストとは「或る一つの単位が、その置かれた状況に従ってその意味や働きを様々に変えること。そのとき「状況」がその単位に対して及ぼす影響力」（長谷川三千子「コンテキストの喪失」玉野井芳郎監修『ジエンダー・文字・身体』新社一九八六年）のことをいう。つまり「何者もそれ自体では自らを決定し、規定することができぬ、自らの置かれた場と状況と他者達とのかわりの中にあつて、はじめて自らがハッキリとした規定をもったものになる」（同上）という考え方である。

主体と客体を明確に峻別し、対象を個別細分化し、コンテキストを徹底的に排除した、一つの設問に一つの回答というスタイルが、近代合理主義の思惟様式である。この近代合理主義を体現しているのが、中央志向型博物館にほかならない。

これに対し、地域博物館が、「地域」という軸を基本におくということ、その「場」というもののもつ、コンテキストの意味を問うことにほかならない。それは、現実のさまざまな諸関係に規定され、媒介されてはじめて存在する、実体的な人間と物（資料）の関係を、改めて問い直すということでもある。

かつて理想とされてきた「近代的個人の自覚」とは、実は「徹底的にコンテキストを拒否することによって生み出された人間像」であった。人々をこの「個人」としてではなく、さまざまな現実を背景としている、生きた「生活者」としてみるのが、地域博物館である。

地域博物館は、博物館のもつ機能を通してコンテキストの復権をめざしている。その意味では、地域博物館論という考え方は、「ポスト・モダン」の潮流のひとつなのかもしれない。

四——消費社会の博物館

六〇年代末以降、二〇年間における博物館の急激な変容は、博物館内部の理由から説明することはできない。余暇の増大、高学歴化など、さまざまな要因は考えられるが、基本は、「消費社会」という新しい社会のスタイル、人々の意識変化の反映とみるべきだろう。

現代社会を構成している個々人は、自己存在への漠然とした不安に直面している。それは経済的不安、老後への不安という直接的なものではない。一人ひとりが、自ら「近代的個人」としての自立を急速に進めながら、しかし同時に、それは「家族の解体」に代表される、コンテキストの喪失を意識させるといって、孤立と個別化